

野鳥 会報

No.74 2012年 10月発行

日本野鳥の会新潟県

鳥のいる風景 トキ *Nipponia nippon* トキ科 特別天然記念物 国際保護鳥



佐渡の山脈を背景にトキの親子が群れになって飛行する。トキ野生復帰にむけて、2008年9月を初回として放鳥が始まってから5年目、2012年夏の初め、トキの家族群が佐渡の空を飛んだ。飛行するトキの群れの写真は、スギ林に営巣した番いが産卵、抱卵、育雛を経て育てた3羽の幼鳥を連れて飛ぶ家族群である。佐渡の空をトキの家族が群れて飛ぶ風景は感慨深い。

大自然を飛ぶトキは、トキという種が本来もつ多くの反応形態や行動様式をわたしたちに教えてくれる。特に初回放鳥のトキ10羽は、佐渡島、日本海、本州を壮大な実験室に、それぞれの個体もつ行動様式の可能性を見せた。雌個体は日本海を渡り、新潟県を越え、遠くは宮城県や長野県まで飛んだ。積雪期に長野まで飛行した個体は、新潟県魚沼の雪深い水田で採餌し長野へと飛んだ。しばらく後、再び長野から積雪の魚沼の同所水田に飛来している。自身の飛行経路を記憶していると考えられる。トキが自然のなかで見せる採餌習性、嘴の使い方、捕食動物の種類など、様々な興味深い反応形態、行動様式を学ぶことができる。

(石部 久)

鳥屋野潟の鳥類

新潟市 岡田 成弘

はじめに

鳥屋野潟は新潟市中央区に位置する約 170ha の潟湖で、開けた湖水面の残る潟湖としては県内最大級である。湖岸まで密集した住宅地と湖面を隔てるように岸边にはヨシ原が帯状の群落を形成している。潟の北東側では栗ノ木川から河川水が流入し、南西側の親松排水路を経て信濃川に流れている。東側には、わずかな湖水面を残した清五郎潟があり、細い水路によって鳥屋野潟へと通じている。近年は鳥屋野潟周辺の都市化が進み、南東部にはサッカー場や野球場などのスポーツ施設や病院など大型の公共施設が建設される一方、鳥屋野潟公園に植樹された木々が生長して都市の中に大きな森を形成するなど、鳥屋野潟は新潟市の中心部にありながら多様な自然要素で構成されている(図 1)。鳥屋野潟にはコハクチョウをはじめとする多くの鳥類が飛来・生息することが知られているが、年ごとに環境が大きく変遷する現在の鳥屋野潟に生息する鳥類について調べるために、2000 年 10 月から 2012 年 9 月までの 13 年間、延べ 1,000 日に渡り調査を実施した。本報告では調査結果の概要について述べる。

調査地域

鳥屋野潟、清五郎潟、鳥屋野潟公園(鐘木地区、女池地区)、潟に流れ込む水路、及び潟に隣接する水田を調査地域とした。



図 1 鳥屋野潟と周辺環境

調査方法

1 年を通じて毎週金曜日の早朝に調査地域に生息する鳥類の調査を実施した。10 月から 3 月までの秋冬期は、夜明けからハクチョウ類及びガン類の生息数を全数カウントし、同時に湖水面及び周辺環境に生息する鳥類の調査を実施した。4 月から 9 月までの春夏期は、夜明け後に調査地域に生息する鳥類を調査した。また、春と秋の渡り期及び繁殖期には定例調査日以外にも随時調査を実施した。

調査結果

1. 鳥屋野潟で生息を確認した鳥類

2000 年 10 月から 2012 年 9 月までの延べ 13 年間の調査結果を表にまとめた(表 1)。

鳥屋野潟及び周辺で生息を確認した鳥類は 15 目 39 科 171 種であった。

国のレッドデータブックに記載されている絶滅危惧種及び準絶滅危惧種であるシジュウカラガン、ハクガン、オオヒシクイ、マガン、アカツクシガモ、トモエガモ、オシドリ、オジロワシ、チュウヒ、サシバ、ミサゴ、ハチクマ、オオタカ、ハイタカ、ハヤブサ、チュウサギ、ヨシゴイ、ケリ、セイタカシギ、コアジサシ、サンショウクイ、ノジコの 22 種を確認した。

2. 鳥屋野潟で繁殖を確認した鳥類

繁殖(営巣もしくは巣立ち後の幼鳥)を確認した鳥類は、10 目 22 科 26 種であった。

鳥屋野潟湖水面においてコウホネ群落で営巣するカンムリカイツブリの繁殖を 2002 年に初めて確認し、2012 年まで 11 シーズン連続で確認した。また

2005年から2012年までは複数のつがいの繁殖を確認した(岡田、2010)。

まとめと考察

1. 鳥屋野潟で確認した鳥類は171種であり、1991年の調査報告に記載されている84種(石部、1991)に比べ確認種が大幅に増加した。また171種は新潟県で生息が記録された416種の41.1%にあたり、島嶼、海岸、山地森林、溪谷、高山など新潟県を特徴づける自然環境を備えていない鳥屋野潟にあっては高い出現率であると考えられる。

主な鳥類グループを新潟県と鳥屋野潟で比較すると、カモ目カモ科の鳥類では、新潟県41種に対して鳥屋野潟24種、58.5%という高い出現率であり、絶滅危惧種のシジュウカラガン、ハクガン、トモエガモなどの絶滅危惧種も確認された。また準絶滅危惧種であるオオヒシクイ、マガンは毎年渡来していることが確認された。コハクチョウの渡来数状況については本報告では詳細を省くが、2009年11月12日には4352羽を数え、初めて4000羽を超える数を記録した。また渡来数は年々増加の傾向にあり、鳥屋野潟がコハクチョウの重要な渡来・越冬地となっていることが示唆された。一方同じ水鳥であるチドリ目シギ科にあっては新潟県の43種に対して鳥屋野潟は5種、11.6%と低い出現率であった。これはカモ科の鳥類が主に湖水面及び水中を餌場として利用するのに対し、シギ科の鳥類は水面と陸地の緩衝地帯にあたる低湿地帯を主な餌場として利用するなど利用する環境が異なることに起因すると考えられ、鳥屋野潟は河川法によって一級河川に指定され、降水時の遊水地機能を担っているために水位の変動が大きく、ゆるやかな水辺地帯が発達していないことが一因であると考えられる。

小鳥類の代表であるスズメ目においては、新潟県148種に対し、鳥屋野潟77種、52.0%と高い出現率を示した。中でもツグミ科は新潟県21種に対して鳥屋野潟14種、66.7%、ウグイス科は新潟県17種に対して鳥屋野潟9種、52.9%となり、主に山地・森林を生息域とする小鳥類の出現率が高い傾向が認められる。これらの仲間は春秋の渡りの時期に公園の樹木や林床部での採餌行動が確認されることが多く、小鳥類にとって鳥屋野

潟が渡りの中継地として重要な役割を果たしていることが示唆された。

2. 鳥屋野潟で繁殖を確認した鳥類は26種であり、新潟県で繁殖記録のある139種に対して18.7%であった。

カンムリカイツブリの繁殖は県内初記録となった。尚、レッドデータブックによれば青森県の湖沼で繁殖しているカンムリカイツブリは「絶滅のおそれのある繁殖個体群」として記載されており、鳥屋野潟における複数の繁殖は特筆すべき事例である。

オオヨシキリなど潟の環境で繁殖する鳥類に加え、トラフズク、コゲラ、エナガなど主に林や山地の樹木で営巣する鳥類の繁殖を確認した。

以上の調査結果から鳥屋野潟は鳥類にとって極めて重要な生息地・繁殖地であると考えられる。

尚、以下の調査結果については別の機会に報告する。

- ・ハクチョウ類、ガン類の飛来・越冬状況推移と潟の利用について
- ・カンムリカイツブリ及びトラフズクの繁殖記録
- ・春の渡り期における小鳥類出現状況

謝辞

本調査にあたり、本多貞夫氏及び本田茂夫氏には多大なるご協力をいただいた。両氏のご協力無しに12年に渡る調査の継続実施は不可能であった。ご協力に対し心より深く御礼を申し上げます。村上真由美氏には調査にご協力いただくとともに貴重な情報をご提供いただいた。調査結果のとりまとめにあたり、石部久氏、佐藤安男氏からご助言をいただいた。厚く御礼を申し上げます。

引用文献

- ・石部 久 新潟市史資料編12 自然 野鳥 1991
- ・日本野鳥の会新潟県支部 新潟県鳥類目録 2011
- ・岡田成弘 鳥屋野潟におけるカンムリカイツブリの繁殖 野鳥新潟 150 新潟県野鳥愛護会 2010

表1. 鳥屋野湯における生息を確認した鳥類 (2000年10月～2012年9月)

種名	繁殖	種名	繁殖	種名	繁殖	種名	繁殖
カイツブリ目		48 サシバ		87 アマツバメ		128 オオヨシキリ	Br
カイツブリ科		49 ハイロチュウヒ		ブッポウソウ目		129 メボソムシクイ	
1 カイツブリ		50 チュウヒ		カワセミ科		130 エゾムシクイ	
2 ハジロカイツブリ		ハヤブサ科		88 アカショウビン		131 センダイムシクイ	
3 ミミカイツブリ		51 ハヤブサ		89 カワセミ		132 キクイタダキ	
4 カンムリカイツブリ	Br	52 チゴハヤブサ		ヤツガシラ科		ヒタキ科	
ペリカン目		53 コチョウゲンボウ		90 ヤツガシラ		133 キビタキ	
ウ科		54 チョウゲンボウ		キツツキ目		134 ムギマキ	
5 カワウ		キジ目		キツツキ科		135 オジロビタキ	
コウノトリ目		キジ科		91 アリスイ		136 オオルリ	
サギ科		55 キジ	Br	92 アオゲラ		137 サメビタキ	
6 ヨシゴイ		ツル目		93 アカゲラ		138 エゾビタキ	
7 ゴイサギ		クイナ科		94 コゲラ	Br	139 コサメビタキ	
8 ササゴイ		56 クイナ		スズメ目		カササギヒタキ科	
9 アマサギ		57 バン	Br	ヒバリ科		140 サンコウチョウ	
10 ダイサギ		58 オオバン	Br	95 ヒバリ	Br	エナガ科	
11 チュウサギ		チドリ目		ツバメ科		141 エナガ	Br
12 コサギ		チドリ科		96 ショウドウツバメ		シジュウカラ科	
13 アオサギ		59 コチドリ	Br	97 ツバメ		142 コガラ	
カモ目		60 ムナグロ		98 イワツバメ		143 ヒガラ	
カモ科		61 ケリ	Br	セキレイ科		144 ヤマガラ	
14 シジュウカラガン		62 タゲリ		99 キセキレイ		145 シジュウカラ	Br
15 マガン		シギ科		100 ハクセキレイ	Br	メジロ科	
16 ヒシクイ		63 ハマシギ		101 セグロセキレイ		146 メジロ	
17 ハクガン		64 キアシシギ		102 ビンズイ		ホオジロ科	
18 オオハクチョウ		65 イソシギ		103 タヒバリ		147 ホオジロ	
19 コハクチョウ		66 チュウシャクシギ		サンショウクイ科		148 ホオアカ	
20 アカツクシガモ		67 ヤマシギ		104 サンショウクイ		149 カシラダカ	
21 オシドリ		68 タシギ		ヒヨドリ科		150 ミヤマホオジロ	
22 マガモ		セイタカシギ科		105 ヒヨドリ	Br	151 ノジコ	
23 カルガモ	Br	69 セイタカシギ		モズ科		152 アオジ	
24 コガモ		カモメ科		106 モズ	Br	153 クロジ	
25 トモエガモ		70 ユリカモメ		レンジャク科		154 オオジュリン	
26 ヨシガモ		71 セグロカモメ		107 キレンジャク		アトリ科	
27 オカヨシガモ		72 オオセグロカモメ		108 ヒレンジャク		155 アトリ	
28 ヒドリガモ		73 カモメ		ミソサザイ科		156 カワラヒワ	Br
29 アメリカヒドリ		74 ウミネコ		109 ミソサザイ		157 マヒワ	
30 オナガガモ		75 クロハラアジサシ		ツグミ科		158 ベニヒワ	
31 シマアジ		76 アジサシ		110 コマドリ		159 ベニマシコ	
32 ハシビロガモ		77 コアジサシ	Br	111 ノゴマ		160 ウソ	
33 ホシハジロ		ハト目		112 コルリ		161 イカル	
34 キンクロハジロ		ハト科		113 ルリビタキ		162 シメ	
35 スズガモ		78 キジバト	Br	114 ジョウビタキ		ハタオリドリ科	
36 ホオジロガモ		79 アオバト		115 ノビタキ		163 ニュウナイスズメ	
37 ミコアイサ		カッコウ目		116 イソヒヨドリ		164 スズメ	Br
38 カワアイサ		カッコウ科		117 トラツグミ		ムクドリ科	
タカ目		80 ジュウイチ		118 マミジロ		165 コムクドリ	
タカ科		81 カッコウ	Br	119 クロツグミ		166 ムクドリ	Br
39 ミサゴ		82 ツツドリ		120 アカハラ		カラス科	
40 ハチクマ		83 ホトギス		121 シロハラ		167 オナガ	Br
41 トビ		フクロウ目		122 マミチャジナイ		168 コクマルガラス	
42 オジロウシ		フクロウ科		123 ツグミ		169 ミヤマガラス	
43 オオタカ		84 トラフズク	Br	ウグイス科		170 ハシボソガラス	Br
44 ツミ		85 コミズク		124 ヤブサメ		171 ハシブトガラス	Br
45 ハイタカ		86 オオコノハズク		125 ウグイス		計 15日39科171種	
46 ケアシノスリ		アマツバメ目		126 シマセンニュウ		※BrはBreedingの略で、繁殖記録	
47 ノスリ		アマツバメ科		127 コヨシキリ		があることを表す。	

合併前の旧長岡市におけるカラス類 2 種の営巣調査

長岡野鳥の会

カラス 2 種(ハシボソガラスとハシブトガラス)は、私たちの身近でしかも同じ生活環境に生息していることから、私たちの生活地域の拡大や生活様式の変化が、その地域のカラスの個体数や分布に少なからず関係していると思われる。しかし、地域内のカラスの個体数や営巣数が詳しく調査された例は全国的にも少ない(玉田他 1993、中村 2000、黒澤他 2003、黒澤他 2004、)。

長岡野鳥の会は、1983 年と 1994 年に合併前の旧長岡市の山中を除くほぼ全域にわたって、カラス類 2 種の営巣状況を調査している(長岡野鳥の会 1993)。それによるとカラス 2 種の営巣数は 1983 年には 140 巣、1994 年には 218 巣が確認され増加の傾向にあった。2 回目の調査から 13 年が経った 2007 年に、長岡野鳥の会は創立 40 周年を迎えた。その記念事業として過去 2 回

の調査を踏まえて、その後のカラス 2 種の営巣状況を再度調べると共に、長岡駅前に形成された集団塒の状況も併せて調査することになった。調査は 2006 年から 2007 年にまたがるが、前年は長岡駅周辺の集団塒の状況を調査し、翌 2007 年の繁殖期に営巣状況を調査した。これらの調査結果については、2007 年 9 月に多数の市民の参加も得て開催した、40 周年記念講演会の折りに「長岡のカラス事情」として報告した。今回はそのときの資料の中から営巣状況の結果を報告したい。

調査地と調査方法

調査した地域は、過去 2 回の調査と同じ合併前の旧長岡市地域である。市の中心部を流れる信濃川を挟んで東地域と西地域に分け、主な幹線道路や鉄道などを境界に、

東地域を 15 区域、西地域を 11 区域に分け、それに信濃川右岸と左岸の河川敷区域を別に分けた(図 1)。東地域は信濃川右岸から長岡駅周辺の市街中心部を含めて東山まで市街地や住宅地が多く、耕作地などの平野部は西地域よりは広がりがない。西地域は、信濃川左岸の広い河川敷を含めて西山丘陵まで建物の密集度は低くなり、耕作地や緑地などの平野部が多くなるため、郊外としての景観が強くなる。

調査は 2007 年にカラス 2 種の繁殖時期に合わせて 3 月から 7 月

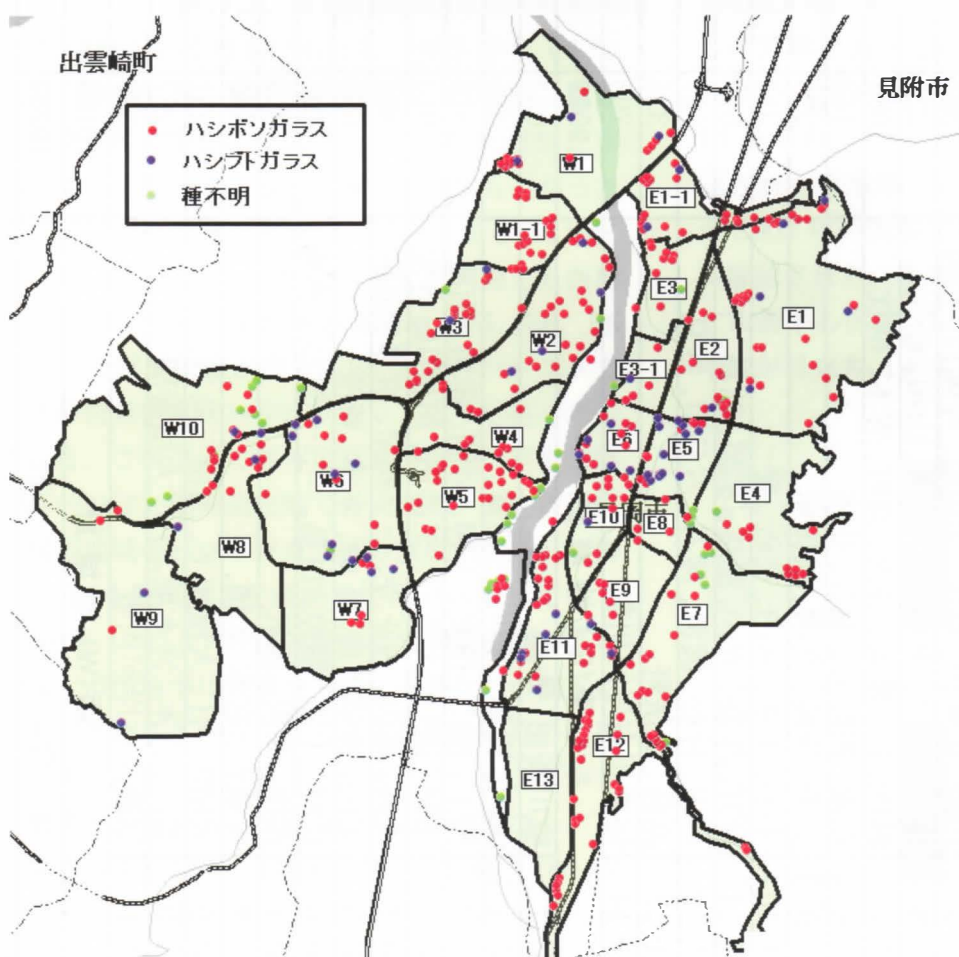


図 1 旧長岡市地域におけるカラス 2 種の営巣分布状況

表1. 旧長岡市地域におけるカラス2種の営巣数と営巣密度(2007年)

調査区域	主な地域	面積(ha)	営巣数				営巣密度(巣数/ha)			
			ハシボソ	ハシブト	不明	合計	ハシボソ	ハシブト	不明	合計
E 1	百束、小曾根、浦瀬、宮路	1777	25	5		30	0.01	0.003	0	0.02
E 1-1	川辺、高見、黒津、新組	615	24	3		27	0.04	0.005	0	0.04
E 2	稲葉、新保、東栄、堀金、永田	493	15	1	2	18	0.03	0.002	0.004	0.04
E 3	下々条、宝、北園、寿	305	6	0	1	7	0.02	0	0.003	0.02
E 3-1	城岡、蔵王、松葉、新町	208	4	1		5	0.02	0.005	0	0.02
E 4	千代栄、中沢、御山、栖吉、	743	5	0	4	9	0.007	0	0.005	0.01
E 5	川崎、東神田、福住、学校町、今朝白、台町	352	6	12		18	0.02	0.03	0	0.05
E 6	稽古、神田、中島、長、水道、山田、船江	251	12	5		17	0.05	0.02	0	0.07
E 7	鉢伏、柿、鷺巣、釜沢、高町、青木、横枕	1081	19	0	5	24	0.02	0	0.005	0.02
E 8	花園、四郎丸、土合、住吉	154	7	0		7	0.05	0	0	0.05
E 9	上条、笹崎、宮内、撰田屋、	395	8	0	1	9	0.02	0	0.003	0.02
E 10	千手、千才、宮内、左近、要	312	8	1	1	10	0.03	0.003	0.003	0.03
E 11	今井、平島、青山、豊詰、水梨、前島、下条	696	24	6		30	0.03	0.009	0	0.04
E 12	片田、村松、渡沢、滝谷、六日市、妙見	1087	36	1		37	0.03	0.001	0	0.03
E 13	高島、三俵野	335	3	0	3	6	0.009	0	0.009	0.02
E 14	信濃川右岸河川敷	295	2	0	3	5	0.007	0	0.01	0.02
東(E)地域計		9099	204	35	20	259	0.393	0.004	0.002	0.03
W 1	脇川新田、李崎、川袋、	1034	2	1		3	0.002	0.001	0	0.003
W 1-1	成沢、雁島、芹川、三之宮、	485	28	1		29	0.06	0.002	0	0.06
W 2	榎下、榎山、榎島、下柳、宮関、蓮湯、雨池	816	25	4		29	0.03	0.005	0	0.04
W 3	高野、福戸、大荒戸、王番田、河根川、寺宝	813	21	2	1	24	0.03	0.002	0.001	0.03
W 4	大島、蓮湯、古正寺、三ツ郷屋、喜多、宝地	497	10	0		10	0.02	0	0	0.02
W 5	北山、希望が丘、下山、才津、新産	653	26	0		26	0.04	0	0	0.04
W 6	長峰、上除、関原、白鳥、ニュータウン、高寺	1193	9	8	1	18	0.008	0.007	0.001	0.02
W 7	西津、深沢、親沢	915	6	4		10	0.007	0.004	0	0.01
W 8	青葉台、宮本、大積、	850	7	2		9	0.008	0.002	0	0.01
W 9	大積3丁目、大積灰下、大積三島谷、	1291	3	2		5	0.002	0.002	0	0.004
W 10	雲出、宮本、宮本堀之内、大積善間	1287	12	1	9	22	0.009	0.001	0.007	0.02
W 11	信濃川左岸河川敷	350	6	0	16	22	0.02	0	0	0.06
西(W)地域計		10184	155	25	27	207	0.02	0.003	0.003	0.02
合計		19283	359	60	47	466	0.02	0.003	0.002	0.02

まで行なった。調査の実施に当っては、各区域を一人の調査員が担当すると共に、「長岡野鳥の会たより」を通じて全会員に協力を呼びかけた。調査内容は、区域内の全ての巣の確認と併せて、カラスの種類、営巣環境、営巣場所、観察された繁殖行動（造巣、抱卵、育雛）などについて記録した。

調査結果と考察

1. 営巣分布と密度

2007年に調査地で発見されたカラス2種の営巣数は、ハシボソガラス359巣、ハシブトガラス60巣、種不明47巣の合計466巣であった（表1）。その分布を図1に示した。カラス2種の営巣は、市街中心部から信濃川流域、さらに郊外の平野部に広く分布している。東地域と西地域で見ると、ハシボソガラスもハシブトガラスも中心市街地を含む東地域に営巣数が多く、両種合わせた営巣数の割合は、東地域に55.6%、西地域に45.4%という分布であった。営巣密度（1ha当り営巣数）は、調査地全体では0.02巣（東地域0.03巣、西地域0.02巣）と営巣数同様に東地域で高くなっている。営巣密度が最も高かった調査区は、東地域の市街中心区域であるE6地区の0.07巣であった（表1）。概して両種とも西地域の郊外よりも、東地域の市街地（E5、E6、E8など）で営巣密度が高く、E5区域のハシブトガラスの営巣密度はハシボソガラスよりも高くなっている。このように郊外よりも市街地で営巣密度が高いのは、他の調査地でも同様で、例えば帯広市周辺地域のハシボソガラスの営巣密度は、市街地の0.04巣に対して農耕地では0.005巣である（玉田他1993）。長岡の市街地で営巣密度が高いのは、市街地では公園や学校、寺社などの樹木に営巣が多いことから、このような場所が郊外に比べて多く存在していることが考えられる。しかし営巣密度が最も高い長岡市の中心市街地でも、東京都の0.15つがい（1ha当り）や札幌市の0.17つがいなどに比べると1/2以下であることがわかった。

表2. 旧長岡市地域におけるカラス2種の営巣数の推移

調査年	ハシボソガラス	ハシブトガラス	種不明	合計
1983	130	5	5	140
1994	190	14	14	218
2007	359	60	47	466

2. 営巣数の変化

2007年のカラス2種の営巣数は、24年前の1983年の調査時より3.3倍に増加している（表2）。その増加数は、ハシボソガラスで2.6倍、ハシブトガラスでは12倍である。この24年間のうち、前半の1983年から1994年までの11年間では、ハシボソガラスは1.5倍、ハシブトガラスは2.8倍の増加である。その後の1994年から2007年までの13年間では、ハシボソガラスは1.9倍、ハシブトガラスは4.3倍に増加している。従って、とりわけここ13年間のハシブトガラスの増加が著しい。長岡市はもともとハシブトガラスよりハシボソガラスが優占する地域である。1994年までの両種の営巣割合は、ハシボソガラス87%、ハシブトガラス13%であったが、2007年になるとハシブトガラスが占める割合は23%に上がっている。では、ハシブトガラスの営巣は調査地のどこに増えてきているのだろうか。1994年のハシブトガラスの営巣数は合計14巣であったが、そのうち10巣は西地域で確認され、東地域ではわずか4巣であった。それが2007年の調査では35巣（58.3%）が東地域で確認された。その中でも特に長岡駅を中心にした市街中心区域（E5、E6、E8、E10など）での増加が目立ち、1994年には日赤町でただ1巣だった

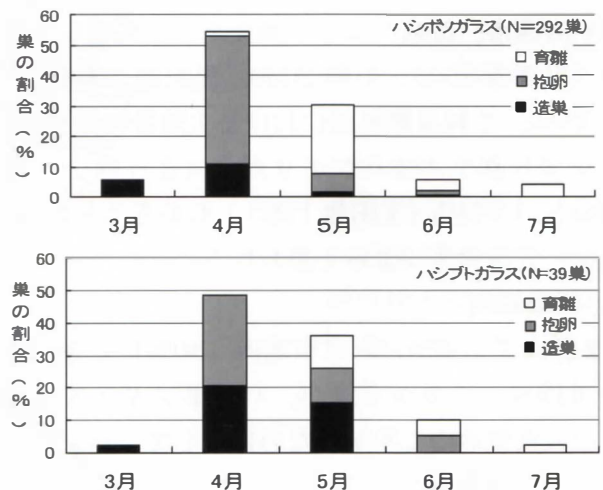


図2. ハシボソガラスとハシブトガラスの営巣時期

たが、2007年にはE5地区の12巣をはじめ、合計18巣がこの市街地で発見されている。このことは、ハシブトガラスの市街地への進出を示唆するかもしれない。ハシブトガラスはハシボソガラスより都市部での生活に適応力があることが東京都や札幌市での調査で報告されている（黒澤他 2003、黒澤他 2004）ことから、長岡市でも今後都市環境の変化と合わせてハシブトガラスの営巣には注目してゆく必要があるだろう。

3. カラス2種の営巣時期

営巣が確認された時期をみると、ハシボソガラスもハシブトガラスも4月に最も多くの巣が確認されている。確認されたときの繁殖ステージをみると、ハシボソガラスは3月から4月に造巣が多かったのに対して、ハシブトガラスは4月から5月に多かった（図2）。5月にはハシボソガラスはすでに育雛中の巣が多かったのに対して、ハシブトガラスはまだ巣作りから抱卵中の巣が多かった。このようにハシブトガラスの営巣時期がハシボソガラスより遅いことは、東京都や高槻市、帯広市などの調査地でも共通して報告（黒澤他 2003、中村 2000、黒澤他 2004）されている。これは繁殖期における生殖器の発達が、ハシブトガラスはハシボソガラスより約1ヶ月遅いという報告（玉田他 1993）もあることから、両種の繁殖習性によると思われる。

4. 営巣場所

2種の営巣場所は人家敷地内（30%）と寺社境内（13%）で多かったが、ハシボソガラスの営巣が人家敷地内に多かったのに対して、ハシブトガラスは寺社境内に多くなっている（図3）。農地内にも営巣が確認されているが、これは圃場内のハザ木や水田内に建つ送電線の鉄塔が利用され

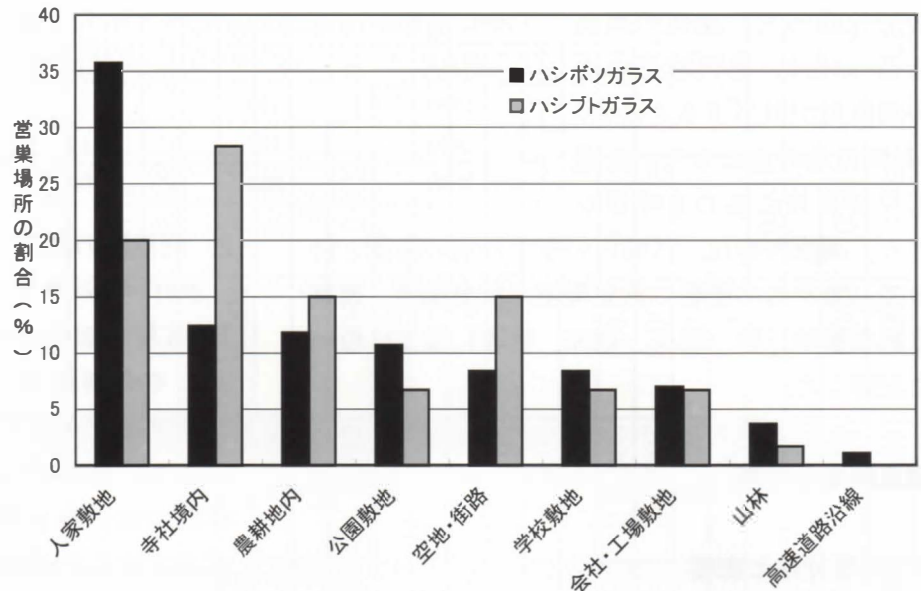


図3. カラス2種の営巣環境

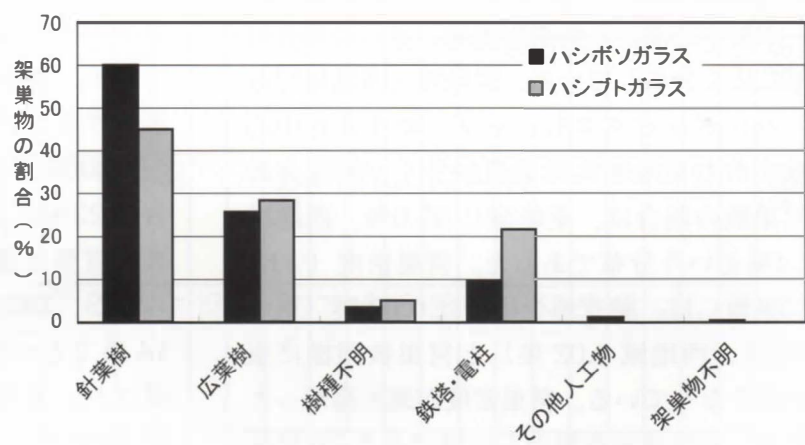


図4. カラス2種の営巣場所

ていたものである。人家敷地内に営巣が多い点は1983年の調査以来変わらないが、2007年には信濃川河川敷の営巣が減り、神社境内での営巣が多くなっている。このことは、カラス2種の営巣が市街地に増えてきていることが関係していると思われる。

巣が架けられていた場所は、樹木と人工物に分けられるが、両種とも樹木への営巣が80%を占めて圧倒的に多かった（図4）。2種の営巣木を常緑針葉樹（スギなど）と落葉広葉樹（ケヤキなど）に分けてみると、ハシボソガラスは針葉樹が67.5%、落葉樹が28.7%、樹種不明が3.8%であった。一方、ハシブトガラスは針葉樹57.4%、落葉樹36.2%、樹種不明6.4%という内容で、両種とも落葉樹より針葉樹の利用率が高かった。針

表3. 長岡市の東地域と西地域におけるカラス2種の送電線鉄塔の営巣数 (2007年)

種類	東地域	西地域	合計
ハシボソガラス	21	5	26
ハシブトガラス	3	8	11
不明	6	0	6
合計	30	13	43

葉樹ではヒマラヤシーダやアカマツなども利用されていたが、スギの利用率が最も高く、落葉樹ではケヤキの利用率が最も高かった。このことは1983年の調査以来変わっていない。東京都の調査ではハシブトガラスは主に落葉広葉樹に、ハシボソガラスは主に常緑針葉樹への営巣が多かったという(黒沢他2003)。長岡ではハシブトガラスも落葉樹よりは針葉樹への営巣が多い点で東京とは異なっている。また大阪の高槻市では、両種とも落葉樹より隠蔽度が高い常緑樹への営巣が多いという(中村2000)。長岡の調査地でスギが多く利用されているのは、調査地にスギが多いことと合わせて、隠蔽度効果が高いことも関係しているかもしれない。

人工物への営巣は、両種合わせて54巣(全巣数の11.7%)が確認された。その中で送電線の鉄塔への営巣が43巣(79.6%)と最も多かった。43巣のうち、ハシボソガラスの営巣は26巣(60.5%)、ハシブトガラスの営巣は11巣(25.6%)で、その他に種不明の営巣が6巣(14.0%)あった。このような人工物への営巣には地域性があるらしく、東京都ではハシボソガラス、ハシブトガラスとも人工物を利用した例は各1例と少なく、しかも鉄塔の利用はなかったという。また帯広市とその周辺地域では電柱など人工物への営巣は1例も確認されていない(玉田他1993)。また、高槻市ではハシボソガラスの人工物への営巣は48例観察され、そのうち92%は送電線の鉄塔が利用されていた。しかしハシブトガラスの人工物への営巣はわずか2例で、しかも鉄塔の利用は全くなかったという(中村2000)。これらの地域に比べて長岡市では、なぜ送電線鉄塔への営巣が多いのだろうか。実は長岡市でも1983年の調査では、鉄塔の利用は全く確認されていなかった(長岡野鳥の会1993)。その11年後の1994年の調査では、東地域の東山に近い村松町の鉄塔に営巣したハシボソガラスの1例だけがあった。したがって、鉄塔への営巣は、

1994年以後2007年までの間のカラス2種の営巣数増加に伴って増えてきたことが考えられる。この事実と併せて、2007年の東地域と西地域での鉄塔利用をみ

ると(表3)、ハシブトガラスは西地域の鉄塔利用が多く(11巣中8巣)、ハシボソガラスは東地域の鉄塔利用が多い(26巣中21巣)ことがわかった。この理由はよくわからないが、両種の営巣数増加と鉄塔利用数の増加を考えると、例えば西地域のように広い水田地帯に古い集落が分布する地域では、集落内にはすでに縄張りを構えるつがいがついて、新規のつがいはなかなか入り込めないのではないだろうか。もしそのような状況があるとなれば、集落間の広い水田の中に建つ鉄塔は、新しいつがいにとっては格好の営巣場所として利用されている可能性も否定できない。このことは、今後長岡野鳥の会としても、さらにこの調査を継続して行く中で明らかにしていきたいと思っている。(文責 渡辺 央)

調査員

腮尾功, 五十嵐伸吾, 五十嵐正義, 井口忠, 池野宏子, 岩本二郎, 内田幸男, 大塚幸男, 小林きよ, 小林茂樹, 篠田直道, 竹田悌次郎, 戸川辰夫, 広川昇, 古川英夫, 細川章子, 山岸太, 横山美津子, 吉成哲, 渡辺恵美子, 渡辺央。

引用文献

- ・黒沢令子・松田道生(2003)東京におけるカラス類の繁殖状況. Strix, 21.
- ・黒澤令子他(2004)大都市の緑地におけるカラス類の繁殖状況. Strix, 22.
- ・玉田克己・藤巻裕蔵(1993)帯広市とその周辺におけるハシボソガラスとハシブトガラスの繁殖生態. 日鳥学誌 42.
- ・中村純夫(2000)高槻市におけるカラス2種の営巣環境の比較. 日鳥学誌 49.
- ・長岡野鳥の会(1993)長岡市内におけるカラス科2種の営巣分布について. 日本野鳥の会新潟県支部報 35.

ツオトケルバム

ヤツガシラ

2012年まだ寒さの残る4月1日から6日まで、鳥屋野湯で確認。

発見者: 本多貞夫 撮影者: 岡田成弘



アカマツの枝の樹皮の間隙などにくちばしを突っ込んで採餌していました



羽づくろいをするヤツガシラ

ヨタカ

2012年6月3日に魚沼市、旧入広瀬の山の中で発見。新潟市在住のTさんが溪流釣りに行く山中で突然現れたヨタカ。手持ちのスマートフォンで撮影。

近くに卵があったので鳥に影響を与えない様に足早に立ち去ったそうです。



カメラを向けるとヨタカが威嚇



地面にヨタカの卵がありました。

山本山タカの渡り観察会 2012年9月16日



山本山 山頂の展望台



360°の展望 ここでタカの渡りを観察しました。

銀山平探鳥会

2012年6月3日（日）に開催された銀山平探鳥会の報告をいたします。

場 所：魚沼市銀山平

日 時：6月3日4：30から7：00

参加者：24名

出現種：キジバト、アカゲラ、コゲラ、カワセミ、ツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ミソサザイ、コルリ、クログミ、ウグイス、メボソムシクイ、キビタキ、オオルリ、シジュウカラ、ホオジロ、ノジコ、カワラヒワ、イカル、ニュウナイスズメ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、以上27種

前日2日（土）は湖山荘で総会が行われました。早朝は曇りのち小雨という天気でしたが、残雪の多く残る新緑の広葉樹林を散策し、27種の鳥たちに出会うことができました。

朝食後（9時過ぎ）は快晴となり、越後三山の駒ヶ岳、中ノ岳や荒沢岳などの稜線にクマタカ、イヌワシ、ノスリ、トビなどが上昇気流に乗って出現し、銀山平の自然の豊かさを垣間見ることができました。

参加された皆様お疲れさまでした。



銀山湖に注ぐ北ノ又川と駒ヶ岳



湖山荘前で駒ヶ岳を飛ぶイヌワシを観察



新潟県探鳥地ガイド 雪国の鳥をたずねて

浅草山麓エコミュージアム

探鳥地の様子

関越自動車道小出インターから約20 km。浅草岳の麓にある浅草山麓エコミュージアムは、国定公園・鳥獣保護区内にあり、53種の鳥類、152種の動物や昆虫、172種の植物などが観察できる自然の宝庫である。

エコミュージアムの入り口にはビジターセンターがある。ここでは数種類の体験型プログラムが用意され、観察路の地図や観察情報などを入手することもできる。

ウッドチップが敷き詰められたバリアフリーの木道が観察コースの半分を占める。周囲にはブナやホウノキ、ミズナラなどの広葉樹林が広がり、初夏の湿原ではミズバショウやモウセンゴケが咲き、ノリウツギやオオカメノキなどの花々には、多数のチョウやハナカミキリたちが訪れる。また、秋はミネカエデやナナカマドの紅葉が美しい。木道付近は、ヤマネに代表される小動物やその痕跡が、よく観察されている。

鳥の観察

探鳥シーズンは道路が除雪される5月中旬以降になる。残雪を残す浅草岳を背景にブナの森からオオルリやクロツグミ、イカル、サンショウクイ、カッコウの仲間などのさえずりが聞こえる。灌木の梢ではノジコ、ホオジロ、林床近くの藪からは、クロジやウグイスが鳴き競い、周囲の森からはアカショウビンの声も聞こえる。上空にはイワツバメ、ノスリ、ハチクマが舞い、時にはイヌワシも姿を見せる。

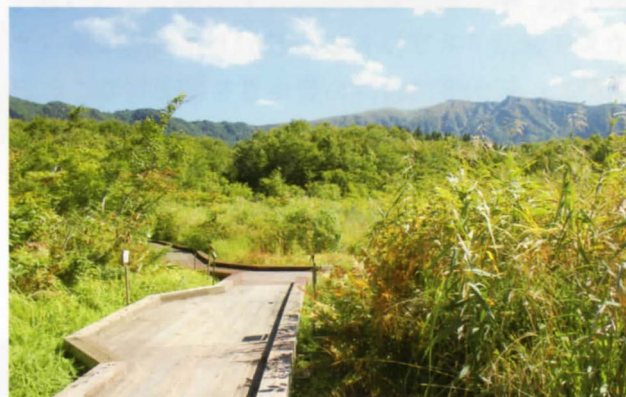
渡りの時期はミヤマホオジロやカシラダカ、ツグミ、カラ類などが観察される。11月下旬の初降雪以後、一部のワシ・タカ類以外はわずかにキツツキ類、カラ類が少ないエサを求めて白い季節を生き抜いていく。



エコミュージアムの入り口にあるビジターセンター



ノジコのさえずり



バリアフリーの木道と湿原

※ 積雪量や昨年の集中豪雨の復旧工事などがあるため、事前にビジターセンターのホームページで交通状況を確認すると良い。

(桑原 哲哉)

発行 2012年10月31日 No.74

発行人 石部 久 編集者 小林成光、浦部良雄、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県

事務局 〒950-0941 新潟市中央区女池3丁目13番25号

TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002